

「バルブ職人」

「失礼します。本日こちらに配属された山本です」

「あ、東京から来た子だ。ようこそ。栗の木温泉へ。観光協会の高橋です。遠かったでしょ」

「はい、東京から電車で4時間半かかりました。すごい山の奥なんですね。こんな自然がいっぱいのところ見たことないんで、テンション上がってます。それで、あの。温泉地を元気にするというコンセプトに憧れて、東京出身なんですけど、こちらに就職させていただきました。もうここに骨を埋める気持ちでやってきたんで、よろしくをお願いします」

「そんな固くならないでよ。ざっくばらんに行こうよ。じゃあ山本だから山ちゃんね。俺のことタカさんって呼んでいいから」

「いや、呼べないですよ。高橋さんですよ」

「業務命令。タカさんって呼んで。ね。じゃあ行くよ、やまちゃん」

「わかりました。タカさん」

「それ、そのノリよ。忘れないで。山ちゃん。じゃ助手席乗って。初仕事案内するから」

「わかりました。タカさん」

「はいここ。この栗の木温泉の、一番見晴らしがいい高台にある足湯。ここが山ちゃんの職場です」

「ここでなにをすればいいんですか？」

「バルブの調節をしてもらいます」

「バルブの調節ですか？」

「見てください。あそこに足湯がありますね。あの右のはじの蛇口からお湯が注がれてる。で、地下のパイプを通して、ここに繋がってる。で、この赤いハンドルがなんでしょう？はい、山ちゃん」

「バルブですか？」

「正解！これを調節するのが、山ちゃんの仕事」

「簡単な仕事じゃないですか」

「これが奥が深いだよ。この足湯できて10年。毎日俺がバルブの調節してん

だけだね。これだなんていう会心のバルブが調節できたのは数えるほどしかないからね。論より証拠よ。今からやってみせるからね。これね、源泉そのままなの。70°あるわけ。で、水と混ぜるわけじゃなくて、この蛇口から出てるお湯の太さで温度を調節するわけ。70°のお湯がいっぱい出てたら熱いでしょ。逆にチョロチョロしか出てなかったらどんどんぬるくなるでしょ。その調節を、このバルブでするわけ。今このバルブの開き具合は、昨日の設定のままになってるのよ。お湯さわってごらん」

「あ、あっついですね。すごい熱いです」

「でしょ。昨日寒かったから、ちょっとあつめにしたわけ。今日はぽっかりあったかいでしょ。寒い日の設定で気温があったかいと、お湯が熱くなっちゃうんだよね。これだとお客様が気持ちよく入れないから、今日はバルブを若干しめて、出てくるお湯の量を少なくします。今からやるから見ててね。栗の木のいがぐりに感謝します。イノシンの脂身が甘いのは栗の木の贈り物。バルブ調節。はっ！くいっ。ふー。5分待って触ってごらん」

「タカさん、ちょうどいいです」

「だろ。これが、バルブ調節」

「あの、ちょっと聞いていいですか？」

「何？」

「バルブ調節する前に、何か呪文みたいなのを唱えてたんですけど、あれなんですか？」

「ああ、あれね。ほら、この栗の木温泉って、栗の木でなりたってるみたいなところあるじゃない。だから、毎回栗の木への感謝の気持ちを表現してからバルブの調節をするようにしてるのね」

「なんて言ってるんですか」

「いいよ、そんなの。俺が勝手にやってるだけなんだから」

「あと、なんかこんなポーズみたいなのをやってたんですけど、あれは」

「あれはまあ、自分の中のルーティンていうか。これも気にしなくていいから。とにかくさ、最初の1週間は俺がやってみせるから、休み挟んで、来週の月曜日から山ちゃんにやってもらうからね。頼むよ」

「わかりました。よろしくお願いします」

「はい、じゃあ今日は業務終了です」

「え？まだ9時半ですよ」

「いいんだよ。今日は山ちゃんの歓迎会だから。山ちゃんお酒飲めるの？」

「あ、はい。人並みに」

「ここの人たちは飲むよー。そっちが仕事って言った方がいいかもしれない。じゃ12時集会所ね。こんにちはー。おや、みなさんおそろいで」

「きたべ、観光協会のタカちゃんあれ、タカちゃん弟子とったの？」

「弟子じゃないですよ。新入社員。山本くんです。山ちゃんでもいいですから。よろしくお願いします！」

「じゃあ山ちゃんがこれからバルブ調節すんのけ？」

「はい」

「大変だなあ。タカちゃんはあるだよ。バルブ調節の名人だからよ」

「いや、バルブ調節でしょ。簡単ですよ」

「いやあ、タカちゃんみたいなバルブ調節できるようになるのは10年かかるべ。山ちゃんはよ、マージャンできんのかよ」

「はい、多少は」

「じゃあ今度うちよってけ。レートはデカデカリャンピンでかまわねえな。じゃあ就職祝いによ、イノシシぶち殺してもってくから、鍋にして食ってくれ」

「ありがとうございます」

「タカさん。あの方はどう言う方ですか？」

「あそこのお寺の住職。みんな和尚和尚って呼んでるから和尚さんでいいよ」

「和尚さんがイノシンぶち殺すとか大丈夫なんですか？」

「まあ田舎だからね」

「田舎だとなんでも許されるんですか？」

「そうだね。だいたい許されるね。お寺の裏にさ、ちょっと深いコンクリートの溝があるんだけど、そこにイノシンのうりぼうってわかる？」

「イノシンの子どもですよ」

「そうそう。そのうりぼうが8匹ぐらいおっこっちゃって、よじ登ろうとしてたらしいのね。であの和尚さんね、和尚さんなんだけど、害獣駆除の免許持ってんのよ。自作のイノシシ殴り棒っていうのがあって、8匹をしとめる

のに、8ふりしか使わなかったって言うのが自慢だから。これ覚えといた方がいいよ。で、説法が上手いからさ、隣の街とかまで説法しに行くのよ。そんときはね、難しい顔して、殺生をしてはいけませんってどの口が言うんだって。それきいてはあさんがうんうんうなづいてんだよ。なんにもしらねえんだな。この人イノシン殺してるよとかおもいながら、おかしくってしょうがないのよ。まあ、そういう面白い人だから」

「強烈な個性の方なんですわね」

「あ、やよいさんだ。こんにちは」

「あ、タカちゃんこんにちは。なんだい、弟子とったのかい？」

「弟子じゃないよ。新入社員。山ちゃんね」

「大変だね。あんたも逃げ出さないようにね」

「いや、逃げ出したりはしないですけど」

「前にいた子は大変だったんだよ。毎日タカちゃんがねー、怒るからさー、ある日探さないでくりくりってへんな書き置き残していなくなっちゃったんだよ」

「ちょっとやよいさん、変なこと言わないでよ。うちの新入社員構えちゃうじゃない」

「頑張るんだよ。今度うちのスナックに飲みにおいで。どぶろくのませであげるから」

「ちょっと、大きな声でどぶろくとか言っちゃダメだよ、やよいさん。今度二人で飲みに行くから」

「タカさん、あの方は？」

「ああ、やよいさんって言ってね、この町で2軒しかないスナックの内の一軒のママ。スナックローズって言うんだけどね。みんなスナックローズなんて呼ばないよ。スナック老女って呼んでるから。で、スナックの隣に、潰れかけてるストリップ劇場があるんだけど、昔そこで踊り子やってたんだよね」

「へえ、そうなんですか」

「やよいさんって若い時すごい綺麗でね、人気あったらしいのよ。で、やよいさんが出演したら絶対東京からファンが来てくれるからって、小屋の支配人がね、従業員のおじさんに軍資金渡して、ストリップ劇場のものですけ

ど、ぜひうちの小屋に出演していただけませんかって口説きに行ってこいって行って、東京にいかせたのよ。そしたらその従業員のおじさんと、やよいさんが、夫婦になって戻ってきたらしいのよ。お前口説きに行けって言ったけど、そっちの意味でも口説いたのかって、おお笑い。今度飲みに行こうね」

「あの、どぶろくってというのは？」

「ああ、この辺ね、みんなどぶろく作ってんのよ。また言ってみれば密造酒じゃない。酒税法違反なわけよ。だからたまに、税務署が摘発にくんの。これをこの辺の人は、「どぶろく改め」って呼んでるんだけど、みんな税務署が来たら捕まりたくないから、どぶろくを流して捨てちゃうわけ。でもやよいさんだけ、どぶろくの樽を背負って、だーっと山の上に向かって駆け出すんだよ。山のとっぺんに神社があって、そこまでたどり着けば、たとえ税務署が追いついても、これは御神酒でございます。最初からここにありましたけど何か？みたいな顔するわけよ。御神酒だったら税務署は手出しできないから、苦虫を噛み潰したような顔をしている税務署の職員の顔を肴に、どぶろくを美味しそうに飲むって言う性格のねじ曲がった人だから」

「楽しそうな人が多いまちですね」

「山ちゃんならすぐになじめると思うよ」

それから1週間が経ちまして

「さあ、1週間見学してもらったけど、今日から山ちゃんにバルブ調節してもらうから、やってごらん」

「わかりました。行きますね。くいと。これでどうでしょう？」

「それ終わったの？」

「はい、終わりました」

「お湯さわってみ」

「え？」

「いいから、触ってみ」

「あ、ぬるいですね」

「ぬるいよな」

「はい」

「観光客のみなさんが、栗の木温泉に来ました。見晴らしのいい高台に足湯

があります、ちょっと入ってみようか。その足湯がぬるかったらどう思う」

「あ、ぬるいなっ、残念だなんて思います」

「だよなあ。インスタに写真あげんのも躊躇するよなあ。おめえ一週間おれの何みてたんだ、山本お！」

「いや、でもタカさん」

「タカさんじゃねえだろ、師匠と呼べ、師匠と！」

「師匠、今日はちょっと寒いんで、昨日よりバルブを開けてみたんですけど」

「昨日より寒いからバルブをあけてみましたって、マニュアル人間かてめえは！何にも見てねえんだな。土日と平日じゃ旅館に泊まってる客の数が違うだろうが！土日旅館がお湯をたくさん使ってたら、ここのポンプのお湯の出も悪くなるんだよ！だったらもっと開かねえとお湯が出てこねえだろうが！もっぺんやってみろ！」

「はい、すいません」

「山本お！いきなりバルブを触んな！」

「え、え？」

「栗の木のいがぐりに感謝しますだろうが」

「いやでもタカさんが」

「師匠！」

「師匠が別に覚えなくていいつて」

「できてるやつはこんなこといちいち声にださなくていいんだよ！お前はできてねえんだよ！栗の木への感謝が足りねえんだよ。この温泉地は栗の木で成り立っているんだよ。おめえみてえなハンパモンは、声に出さなきゃ表現できねえだろうが！栗の木のいがぐりに感謝します」

「く、栗の木のいがぐりに感謝します」

「イノシシの脂身が甘いのは栗の木の贈り物！」

「イノシシの脂身が甘いのは栗の木の贈り物。(バルブを触ろうとする)」

「鶴の型は！」

「鶴の型？」

「俺がいつもやってんだろうが、これだよこれ。天正5年、一羽の鶴が、栗の木川に落ちたところ、温泉が湧き出たという伝説を表現してるんだよ！鶴

のおかげまんまがただけてんだろうが！だったらそれを表現してやらねえと失礼に当たるだろ！バルブ調節！

こうだ！さわってみろ」

「ちょ、ちょうどいいです」

「わかったかバカヤロウ。わかったらとっこのこのやろう！」

「はい！」

「山ちゃん、お昼ご飯何食べる？」

「豹変するんですね」

「え、何が？」

「いや、さっきと全然違うんで」

「ごめんね。やっぱりさ、10年もバルブと格闘してると、哲学みたいなもんが生まれるんだよね。やっぱり他人がバルブ調節を甘く見てるってのがすごく許せなくて、ちょっと感情的になっちゃったけどごめんね」

「いえ、それだけ師匠がバルブ調節に真剣に取り組んでいる証だと思います」

それからくる日もくる日も地獄の特訓の日々が始まります。

「ちがうっつってんだろうが！よく見る、今日は全体的にジジイが多いんだよ。ジジイってのは熱い湯が好きなんだよ！だからこれじゃぬるすぎるんだよ、バカヤロウ！」

「みんな旅館の中にいるんだからなんにもみえないですよ。なんでジジイが多いってわかるんですか？」

「風によって加齢臭が飛んでくるだろがよ！」

「わかりません！」

「ほらだから今日は頭の悪そうなギャルしかいねえだろが。あいつら寒いとよ、ストッキングはいてくるから足湯なんか入らねえんだよ。ということは頭の悪そうなギャルを連れてる頭悪そうな男の子しか入らねえんだよ。そう言うときはな、嫌がらせのように熱くしてやるんだよ！」

「はい、師匠！」

「バルブー調節。バルブー調節。だめだ。ぜんぜんうまくいかない。才能ないのかな、おれ。はあ。カランコロンカラン。ま、やってる？」

「あら、やまちゃんじゃないの、どうしたの、落ち込んで」
「バルブ調節がうまくいかなくて。どぶろくちょうだい」
「はいどうぞ。うまくいってないのかい。でもあんた続いでるよ。いままで
何人かいたけどね、みんなすぐいなくなっちゃったもん」
「どんなに続けても、師匠みたいにできないんですよ」
「何が難しいの？」
「鶴の型」
「鶴の型かい？」
「ま、知ってるの？」
「知ってるも何も。あれを教えたのはあたしだもん」
「そうなんですか？お願いします」
「ちょっと、山ちゃん、土下座なんかするんじゃないよ」
「お願いします！俺にも、俺にも、鶴の型を教えてください」
「しょうがないねえ。レコードかけとくれ。
(白鳥の湖)ティラリラリラーラーラー」
「こ、これは、これは俺が理想とする鶴の型です」
「タカちゃんもね。俺のバルブ調節がうまくいかないのは、鶴に対する感謝
の気持ちが足りないからだって悩んでてね。じゃあ体で表現すればいいじゃ
ないって、あたしが手取り足取り教えてあげたんだよ。
これから毎日通いな。あんたにも教えてあげるから」
「ありがとうございます！」
「ティラリラリラー」
「脱がなくていいです！」

「師匠、それでは参ります。栗の木のいがぐりに感謝します。イノシンの脂
身が甘いのは栗の木の贈り物。バルブー調節！はっ」
「山本お。鶴の型よくなったじゃねえか」
「ありがとうございます」
「でもよ。なんでこのバルブに勝手に目盛りつけてんだよ」
「はい、私なりに統計を分析しまして、気温や人数、年齢層で目盛りを割り
出して。表の通りにやればほぼ間違いなく」

「何にもわかってねえな、山本お！ほぼじゃだめだろ。間違いなくやらなきゃ意味がねえだろ！」

「すみません」

「考えるんじゃない、感じるんだよ。この温泉街全体に流れてる空気を全身で感じるんだよ。こんな目盛りに頼ってるようじゃいつまでたっても半人前だぞ、山本お！」

「申し訳ありません、師匠！」

「おめえ休日やすんでるだろ。あ？おれはバルブが心配だから休日でもきてるけどね」

「はい、申し訳ありませんでした」

「和尚さん。おれもうどうしていいかわかんなくて」

「何がわかんねえんだよ」

「師匠にさ、考えるんじゃない、感じるんだって言われたんだけど、全然わかんなくてさ」

「山ちゃんよ。おめえも山籠りするか？」

「おめえもってなんですか？」

「ああ、タカちゃんもよ、山籠りするまでは、足湯の温度にブレがあった。でもよ、2ヶ月山籠りして気配でマムシを探せるようになってからはブレが一切なくなった」

「気配でマムシをですか？」

「そうだよ。マムシは山うなぎちうて精がつくだ。マムシってのはてめえが王様だと思ってるから、人間が近づいても逃げねえんだ」

「あー、漢方薬屋さんにはいましたね。ガラスとんとんってやっても全然逃げないんですよ」

「ところが、タカちゃん山籠りして、山中のマムシを、食べ尽くさんばかりに食いまくってよ、気配でマムシを見つけられるようになってから、あの逃げねえマムシが、タカちゃんの足音聞いただけで、するするっと逃げるようになっただよ。おめえも行ってくるか？」

「行ってまいります」

それから2ヶ月。なんの音沙汰もありませんでしたが、ある日和尚さんが庭の掃除をしておりますと、マムシがすやすや眠っていました。ざっざざと、力強い足音が聞こえてきたかと思うと、マムシがびっくりして飛び起きて、するすると逃げていきました。

和尚さんが振り返ると、そこに立っていたのは、髪はボサボサ、髭はぼうぼう。途中素手で仕留めた熊の毛皮をきてイノシシのもも肉の燻製と鹿の角を交互にかじりながら降りてきた山ちゃん
それを見て和尚が一言
「山ちゃん、あなた。なりましたな」

「師匠。2ヶ月、かつてに留守にして、誠に申し訳ありませんでした。バルブ調節、やらせていただきます」
「やってみろ」
「山ちゃんがんばってね」
「おめえならできるよ」
「栗の木のいがぐりに感謝します。イノシシの脂身が甘いのは、栗の木の贈り物。
バルブ調節！」
山ちゃんがわずかにバルブを緩めると、摂氏70度のお湯が足湯に流れて行く。
今日の気温、水温、湿度とあいまって、お湯がかくはんされ、ちょうど42°の理想の足湯が出来上がりまして。
「どうですか、師匠」
「おめえは、今日から、、、、、、、、
真打昇進だ！」
「よかったね。山ちゃん」
「めでてえめでてえ」
「よくやった。ようやく俺にも、後継者ができた。おめえはもう立派な、足

湯職人だよ」

「ありがとうございます。師匠」

拝啓。

お元気ですか、師匠。

師匠と過ごした3年間は忘れることができません。右も左もわからない私を一人前の足湯職人に育てていただきまして、感謝の言葉もありません。本当に栗の木温泉に骨を埋めるつもりだったのですが、母の介護のため、東京で再就職をすることをお許してください。

必ずまた伺います。それまでお元気で。

山本。

「次の方お入りください」

「山本と申します。よろしくお願ひ申し上げます」

「前職は、温泉地の観光協会におつとめでしたか。どういったことをされてましたか？」

「はい、3年間。主に。バルブ調節を」